

効果をあげる新しい技法

# 生徒指導が 子どもを変ええる

生徒指導は教育相談型にシフトするとともに、子どもたち同士の中に助け合える関係を作ってゆくことが必要。そのための技法を提案する。

国立教育研究所  
滝たき 充みつる

## 変わってきた 生徒指導のイメージ

生徒指導をめぐる考え方が、この20年ほどの間に変わってきています。

生徒指導は、生活面全般の指導という形でしたが、1970年代後半に校内暴力が起きたころから、枠をはみ出すものをいかに元へ戻すか、いかに取り締まるかが生徒指導であるかのようになりました。

しかし、その後、いじめや不登校という問題が起きて、取り締まり型の生徒指導では、対応しきれなくなった。

さらに、神戸の少年事件や、黒磯の教師刺殺事件などになると、本来生徒指導が得意とした領域のはずが、これも対応できていない。とてもそんなことをするとは思えない、ふつうの子どもが事件を起こすからです。事が起きてからどう取り締まるかという事後対応ではどうしようもない、対応した時点ではもう事件が起きてしまっている。

このように、校内暴力の時代にできあがった生徒指導のイメージでは、機能しなくなっている。このあたりをきちんと考えないといけない。

一方、いじめや不登校などに関しては、カウンセリングという心の対応が言われてきた。

学校が開かれることはいいことで、カウンセラーの知恵を借りること自体は問題ないのですが、不登校などは、お任せすればいいというような感じになってきているのは問題だと思えます。

不登校になってしまった子どもに対しては、マンツーマンで、いろいろな状況を加味しながらケアしなければならぬから、カウンセリングでいい。ところが、それ以前に学校が面白くない、行きたくないという雰囲気があるとすると、これはカウンセラーの出番ではなく、学校として改善していく必要がある問題です。

# 生徒指導をめぐる 学校の混乱

もう一つ、非常に気になっているのは、カウンセリングマインドというものを強調する考え方です。全部の教員がカウンセリングマインドを身につけることで問題がなくなると簡単に考えられていることが多い。

ところが、生徒指導を従来からやってきた先生は、それでははじめがつかなくなる、と言う。これは当然の話です。

もし学校の先生がみんなカウンセリングマインドで対応し、みんな許していくと、これはもう何でもありになってしまう。教師全員がカウンセリングマインドを、というような言い方には、非常に疑問があります。教師の立場として厳しく指導する人がいる。一方でカウンセラーが受容する。そういう役割は両面必要なのです。

「心の教育」と言われ、文部省がスクールカウンセラーの事業を始めた。カウンセラーさえ導入すれば事は解決することか幻想が蔓延している。

これは非常に困った話だと思えます。たとえば生徒指導の担当の先生を集めて講習会をする。先生たちにカウンセラーのよう

な教育相談中心の役割を果たさせるつもりかどうか、はつきりしていない。生徒指導はこれからは教育相談が中心だから、先生たちにカウンセリングの知識や技能を身につけさせて、学校の中で、その役割を果たさせたいのならばそれはそれでいい。ところが現実には、従来の取り締まり型の生徒指導の先生を呼んできて、カウンセリングの講習を受けさせている。まさにパニックが起きるわけです。どの役割を自分が演じていいのかわからない。厳しくする先生が一方にいて、一方で受容する先生がいるべきなのに、その両方を一人の先生にやらせようとする。ほとんど不可能です。そのあたりの見通しがないまま、ただカウンセリング、カウンセラーということをやっている状況がある。

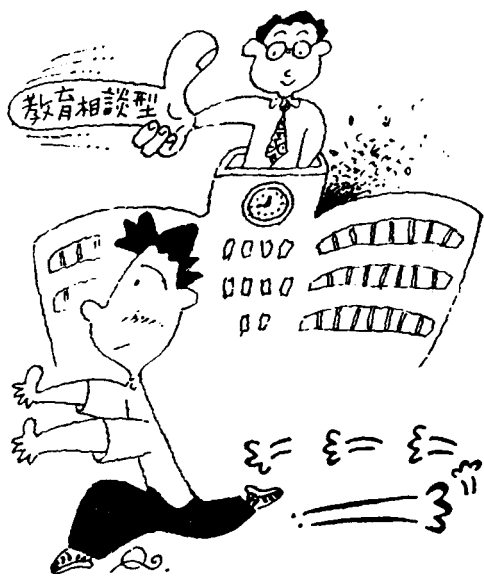
カウンセリング、カウンセラーというものを、本気で学校の中にきちっと定着させる見通しがあればいいのですが、スクールカウンセラー事業は委託研究事業であって、まだ制度として定着しているわけではない。また、将来的に定着させるといふことならば、当然養成といふことも考えなければならぬ。現実にはスクールカウンセラーの中心になっている臨床心理士は、学校ではなく病院での勤務を想定してトレーニングを受けている。したがって、うまくいっている学校というの

は、学校のことを非常によくわかっているカウンセラーが入っている。反対に、学校という敵陣に単身乗り込んで子どもを守るといふような姿勢だと、全然話にならない。先生とカウンセラーとのコミュニケーションがうまくいっているかどうか、あるいは役割分担がきちっとできているかがポイントです。ただ、学校の中で、いじめとか不登校という問題が起きていたら、もっと先生たちが責任を持たなければいけない。もともとそれは生徒指導という考え方の中に含まれていたことですから。

## 取り締まり型から 教育相談型へ

原点に立ち返って生徒指導をきちっとやるためには、これを新しい生徒指導と言っているかどうかわかりませんが、今までとは違った形を考えないといけない。

まず、取り締まり型から教育相談型へのシフトです。教育相談といっても、カウンセリングとかカウンセラーというふうに専門的に考える必要はないし、マンツーマンで相談を受ける必要もない。ベテランの先生だったら、休み時間に子どもたちと話をしながら、情報収集したり指示したりアドバイスを与えたり



ということをやっています。そういう広い意味での教育相談というものにシフトしていけばいい。

もう一つは、これまでのような起きてからの対症療法から、未然に起きにくくするという型の予防教育が必要です。つまり、教育相談型の、あるいは予防教育型の生徒指導というものを考えていくしかありません。

これは学校全体で取り組むしかない。学級崩壊などの問題とも関係しますが、個々の教師では対応しきれない。学級崩壊は、教師の力量がそこそこにあっても起きてしまう。むしろベテラン教師の学級で起きやすいのは、問題を抱え込むからです。

問題が行き着く先は、日本の学校の抱え込みの体質——教師個々人の抱え込みの体質、また学校としての抱え込み体質ということに

なります。それをクリアしないかぎり、いくら地域住民の協力や、カウンセラー、専門家の協力を得ても、うまくいかない。

学校全体で、日常的な生徒指導、生活指導というものをきちっとやっていく。そして、そのために生徒指導の体制を作っていくということと

## 必要とされる 教育相談担当教師

取り締まり型から教育相談型にシフトするキーワードが「相談と支援」です。

その具体的な方法は、教育相談担当教師を作るといことです。どの学校でもできると思います。

今でも生徒指導担当の先生が教育相談的な役割を期待されているというのは、確かです。ところが矛盾しているのは、そうした先生には一方では取り締まり的な役割も期待されているということとです。ただ、それに関しては教育相談中心というようにもっていけないこととはない。比較的簡単にクリアできる話です。

一番の問題は、生徒指導を担当している先生も授業を普通に持っているということです。中学校などは、少ない人で1週間に22コマ、多い人で26コマ、生徒指導の担当者も15〜20

コマは持っています。

これは、取り締まり型の生徒指導ではなく、教育相談をやっていくうえでは致命的だと思います。

指導と受容というのは根本的に分かれなければならぬ。しかし教師が教科を持つということは、指導すなわち評価を伴うわけですから、受容するときは評価は一切行わない。あなたがいい子か悪い子かは知らない、勉強ができる子かできない子かは知らない、でもあなたの言うことを私はまず聞いてあげたいと思う、ということなんです。

当然、教育相談を中心に本気でやろうと思うなら、担当教師は授業をはずれたほうがいい。どうしても持たなければならぬのなら、評価がからまないものがない。そういう体制ができないかぎり教育相談型にシフトするといっても不可能です。

## ティームティーチングや 総合的な学習の時間を 活用する

ですから、現実的に可能な方法として考えているのが、ティームティーチングの活用です。評価を行わないカリキュラムは、特別活動と道徳しかない。道徳と特別活動のティー

ムティーチングを、教育相談を担当している先生たちが受け持つ、という形です。

これは便法以外の何物でもないが、ただ少なくとも子どもたちにとって非常に効果が大きい。教育相談の先生は、自分に成績をつける先生ではないということは、子どもにとって楽だということです。

これまでの生徒指導の先生たちが直面していた問題に、授業を受け持っていない子どもは間接的にしかわからないということがあります。それが、ティームティーチングで道徳もしくは特別活動に入るとすると、1学年5学級の中学校で15、7学級で21、授業コマ数は今までとあまり変わらずに、全部の子どもたちの顔を見ることができるよう。

しかももっと大きいのは、教師の連携が促進されることです。学校で生徒指導の体制を作るときにネックになることは、生徒指導の問題は生徒指導の先生個人が抱えるか、あるいは学級担任個人が抱えるかとなってしまう、隣のクラスには関心がないといった風潮です。教育相談・生徒指導は、本来は学校全体で取り組むべきもので、すべての先生がかかわるべきものです。ところが、現実には特定の人に任されて細分化された状況の中でやっている。ティームティーチングが入るということは、そこを突き崩していくための突破

口になる。

少なくとも学級担任だけでその子どもを見るのではなくなります。だから仮に問題を起こした、いじめを起こした、いじめられた、あるいは不登校になった子どもが現れたときに、学級担任とは違う目で、教育相談担当の先生が見ることができれば、それは非常に大きい。さらに理想を言えば養護教諭の先生が加われば3人の目で見ることができるよう。3人ぐらいで見えてやらないと子どもたちの全体像というものは見えてこない。

ですからティームティーチングで入る仕組みを作ることで教師の連携の糸口がつかめる。



特に小学校の場合でいえば、学級崩壊の予兆みたいなものを見逃さないという意味で非常にうまくいく。

また、来年から前倒しをしてもいいという「総合的な学習の時間」があります。それを活用することも考えています。もし、総合的な学習を担当する先生を作るのならば、そのうちの一人に、生徒指導なり教育相談なりをあてるのです。道徳などは行事でつぶれることが多いですから、確実に教室の中に入っていくほうがいいということです。もちろん、この場合もその先生1人ではなく、学級担任と一緒にやったほうが具合がいい。

今まで道徳は道徳、特活は特活とばらばらになりがちだったし、どちらかというと系統的に何かをやるといってもなかつた。それを生徒指導的な観点から、子どもたちの心の教育とか健全な精神の発達を射程に入れたカリキュラムとして、あるまとまった時間、子どもたちいろいろなものを提供しながら子どもたちの変容を図っていく。そういう意図的なものにしていく必要があります。そのために、この総合的な学習の時間を使っても当然いいはずですよ。

そのようにやっていこうと思えば、先ほど言った教育相談担当の教師というのは存在しうるだろうと思います。

## 校長先生の リーダーシップが必要

こうした提案を校長先生や現場の先生にすると、必ず出てくるのは、あと1人加配教員が来たら文句なしだという声です。

確かに、チームティーチングに振り替えると、単純に見れば仕事の負担が増す。せっかくの空き時間に他の授業を手伝うわけですから。でも逆に自分の授業を他の先生が手伝いに来てくれるというふうに考えてみると、負担としては同じになる。で、子どもにとつての効果はどちらが大きいかは歴然としていません。複数の先生が入っているほうが明らかに子どもたちに落ち着きが出てきますし、理解が遅れている子どもについても教えることができる。

きちつとやるためには、現在の枠組みの中ではなかなかむずかしい。加配のかわりに「総合的な学習の時間」を活用すれば、できる見通しはある。しかし、現時点でやろうとすると、たとえば英語を持っていた生徒指導の先生の英語の部分をなくすためには、英語の先生を1人もつてこなくてははいけませんから、これはなかなかむずかしい話です。でも、これは校長のリーダーシップしだい

です。こういうふうのうちはやる、と校長は言わなければまずいし、そういう責任を持っています。それは2002年からの地方分権化の流れ、特色のある学校づくり、校長の権限の拡大にもつながるわけですから。

校長は今までと同じようなやり方をするのではなく、うちの学校では何が大事で何が大事ではないかを考えなければいけない。たとえば、生徒指導的な面は全然必要はない、ひたすら学力向上だというのなら、総合的な学習の時間をそういうふうに使えばいいし、そういう先生たちを集めればいい。そうではなくて心の教育に重点を置くのであれば、そういう力のある先生を集めてくる必要があるし、そういう人たちが学校の中で動ける体制を作らなくてはならない。そういうリーダーシップをこれからの校長は求められています。

## 学校全体で取り組むための方法

私が今、提案しているチームティーチングのようなものは過渡的なやり方ではありませんが、同時に、将来的にもそういう形が望ましいと思っっています。しかし、もう少し具体的に、2つの方法を提案しています。1つはピースメソッドというやり方で、もう1つは

ピアサポートという形です。

ピースメソッドというのは、取り立てて何をするというわけでもないのですが、学校経営というものをもう少し目に見える形にしていくための方法と言えるでしょう。

今まで学校経営は、前年度に準じて年間計画を作り、ほとんど勘と経験に頼ってやっていく。それで、目の前のことがクリアできればいいとなりがちでした。

残念なのは、いろいろなメインになる行事があるにもかかわらず、それぞれの先生がそれぞれの担当する中で張り切ってるだけで、なかなか全体にそれが還元されていかない。結局、一部の先生だけが頑張っているというふうになりがちですし、他の先生からは、いったい何をしているのか見えない。手伝ってあげたくても何を手伝ったらいいかわからないという状況がある。日本の先生たちは連携協力が下手だと言うのは、そのところですが、そもそも連携したり協力したりするために、大きな流れが見えなければならぬ。今我々の学校にはどんな課題があつて、それをどんな方向で解決しようとし、そのために何が必要かということがわかって、はじめて、連携協力ができる。大きい石を動かすには、どっちへ動かすのか方向を定めないと、めいめいが勝手にやっても動きません。今までの

学校は、石にロープをかけて、みんなが思い思いに引つ張っていた。違う方向に引つ張っていたり、タイミングが合わないから、動かない。どっちへ動かすか決めて、全員の手を合わせれば少しずつでも動いていく。ところが肝心のその部分が見えない。これは、校長のリーダーシップの欠落の問題であり、同時に、そうやって協力することに慣れていないということも問題だと思えます。

そこをもう少しすっきり見える形にしていこうというのが、ピースメソッドという考えです。ピースとは、PEACE——プレパレーション、エデュケーション、アクション、コピーング、エバリユエーション——という5つの段階を意味しています。

## 子どもの意識が出発点

まず一番最初の「準備段階」で、子どもたちの課題を明らかにする。はじめが多いようだったら、はじめに関するアンケート調査などをやる。やる気がない、主体性に欠けるといふのであれば、何がしたいのか、みんなと一緒にしたいことは何か、一人でしたほうが気持ちいいとしたら、それはなぜか、というようなアンケート調査をやる。子どもたちの意識はどこにあるのか、子どもたちが何に悩

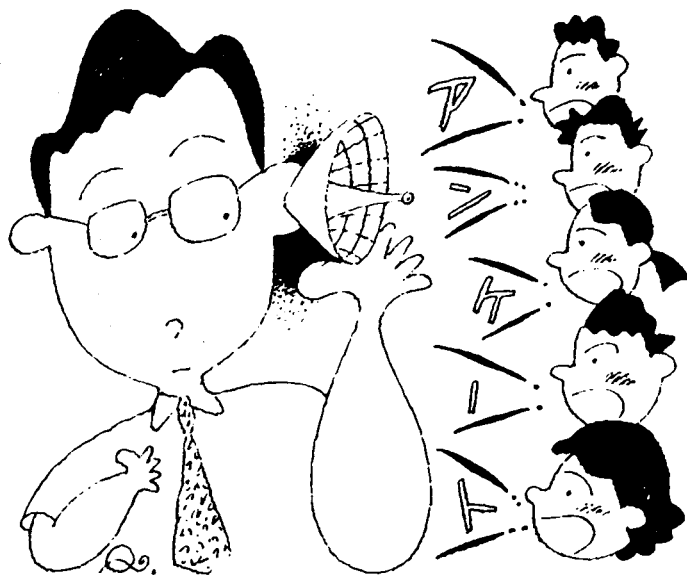
んでいるのか、何を求めているのか、を出発点にするわけです。

次に、その調査の結果を教員が共有する必要がある。はじめなどの場合、それぞれの学校で調査はしますが、何パーセントぐらいありましたという報告を職員会議でやって、それで終わり。その数字は問題なのかどうか、それをどうしたいのかという話にはならない。共有するためには、課題を自分たちの目や手を使って確認しないとだめです。

ピースメソッドの場合、結果は必ず学年別に集計して、全校の先生がどこかの学年にはりついて、その数字を検討していただく。たとえば2年生と比べたら1年生はまだまだどうか、そういう話でもいいわけです。とにかく話をしてもらおう。

一方的に生徒指導の先生が話すのなら、右の耳から左の耳に抜けていってしまいますが、自分の目で確かめながらあれこれ考えたという部分があると、子どもたちに何が問題かがはっきりと残るわけです。

残っただけでは意味がないので、その課題をどうしたらいいのかというところまで考えさせる。さらに、考えるというだけで終わっては困るので、その次に、どれを、どう変えたいかがわかったら、そのために何をするか、目標を掲げて行動するということまで考え



させる。実はその段階ではじめて、教師がある程度意識を共有できたということになります。

意識の共有という話になると、はじめは絶対許してはいけない、みたいに強引に共有させがちです。これは問題です。当然、先生一人ひとり個人差がある。はじめによって育つ部分もある、と思っている人もいるのに、はじめは絶対にいけない、そう思い込みなさいと上から言われても、その先生にしてみたら借りてきた考え方ですから、説得力はないし、子どもたちだって変だなと思ってしまふ。そういうレベルでの一致ではなく、問題意識

が共有でき、課題が共有できれば、少なくとも最低限の一致というのがでてくる。そうすれば少しでも先に進もう、あるいは現状を守ろう、という話に絶対なる。

つまり、足を引く張る人間が絶対出てこなくなる。正反対の方向に動く人がいなくなる。今までは、よかれと思って先生方がばらばらに動いて、お互いの足を引っ張っていたようなところがある。共有されていけばそういうことにはならない。この、絶対にそこで共有点を見いださせるという段階が「エデュケーション」という領域です。

次に「アクション」ですが、ここではスロークンを出して、それに基づいて順番にやっていく。当然、学校の年間計画はすでに決まっていますから、その年間計画の中に目標を位置づけ直していけばいい。たとえば、今までだったら、修学旅行は修学旅行、体育祭は体育祭、別々だったけれど、大きい目標が見えてくると、当然それに沿った形での目標を立てられる。たとえば仲間関係が学年の課題であれば、仲間関係をよくすることのできる修学旅行、仲間関係を育めるような体育祭という形にもっていきます。

そういう大きな流れの中で繰り返し子どもに働きかけていくと、子どもたちも何が課題なのかわかってくるし、実際そうやって何が

課題かわかって動き始めれば、先ほど言ったように大きな石でも動きます。そして3か月4か月たつと、あれ、この石動いている、というのが、みんなに見えてくる。いったん動いているのが見え始めると、これが励みになって、またさらに力が入るということになってくる。

教師にも、保護者にも、子どもたちにも、今何をやって、どの方向に行こうとしているのかわかるということは、すごく重要なことです。

実際、取り組みのなかでも、子どもたちが変わったということ折りこみながらあげてあげる。たとえば、半年に1回の振り返りみたいなところで、生徒会なら生徒会にまかせて、その半年間の取り組みを振り返らせてみる。今までなんとなくやっていた子どもも、言われてみるとこれだけ動いたね、と感じが見えてくるわけです。

そういう形で、子どもにも還元し、当然教師にも還元するということをやりながら1年間やっていく。それははじめ防止でもいいし、薬物非行防止でもいいし、あるいは、主体的な力を身につけようでもいい。そういう形で1年間やっていくなかで、必ず子どもが変わってくる。

これは今までの学校の先生たちの努力が、

いかに空回りしてきたかということでもありません。先生の大半は手抜きはしない。手抜きはしないけれども気まぐれや思いつきで動いている部分もある。だからせっかく力を120パーセント出しても、それが他の人たちとうまくかみ合わない。でも、本当にかみ合い始めたなら、今の80パーセントの力でいい。90パーセント出したなら今より必ずよくなるし、100パーセント出したなら、今の数倍いい学校になるといえるのは当然の話です。

学校の雰囲気が変わると、子どもたちは非常ににおだやかになってくる。ある程度おだやかになってくると、校則に依存した取り締まりのようなことをしなくてすむ。わざわざ呼びつけて話を聞かなくても、休み時間に雑談していればほとんどわかってしまうぐらいのところまで行く。先生たちの力がかみ合ってくると、ゆとりが出てくる。ゆとりが出てくると、子どもをもっとゆとりで見ることができると、子どもも言っていること、やっていること、その裏にあるものにまで気持ちが届く。そこまでわかってもらうと、子どもも安心して先生に身を任せられる。

考えてみれば当たり前のことで、教育とはもともとそういうものだったので、学校は全体の雰囲気の中で子どもたちが感じ取って動いていくという面が大きいというこ

とです。

## ピアスメソッドという技法

ピアスメソッドの具体的な事例をあげます。

この学校は非常におだやかな学校ですが、それでもアンケート調査（先生がアンケートするのではなく、秘密は絶対守るから本当のことを書きなさいという形でアンケートしたものを国立教育研究所に送ってもらった）をしたところ、やっぱりいじめられた子どもたちがかなり出てくる。3割4割ぐらいいました。しかし、ピアスメソッドに取り組んだ後にはそれが減ってくる。特に軽いいじめに関しては確実に減る。それから、学校に来るのが楽しいと「よく感じる」「まあ感じる」という項目でも、「よく感じる」が3年生は3割ぐらいたったのが5割ぐらになりました。

また、その取り組みの中で、実態を共有するというプロセスの一つのかぎになったことがある。子どもたちのいじめとか学校不適応の背景にストレスがあり、そのストレスの原因の中に教師の言動というのが相当あるはずだと考えて、アンケートの中に入れた。すると、教師がえこひいきをするとか、そんな話が出てきました。当然、学校の先生たちはそ

ういう数字を見て検討するときに不審がるし、不快感を覚える。そんなはずがないと。えこひいきしているつもりはないし、子どもたちの言い分を聞いているつもりだし、わけも聞かずにとりつけたりはしていないはずだと。

実際、その学校はおだやかな学校で、そんなはずはないと私も思うのですが、子どもにはそう受け止められている部分がある。

結局、そういう数字が出てきたものですから、先生たちもそれから、叱るときに考えてから叱るようになった。やっぱり半年ぐらいたら子どもたちの評価が変わります。

先生たちが自分としては認めたくないんだけれども、そう思われているんだたら多少改めようじゃないかと。しかもそれは個人的にということではなくて、どの先生かわからないけれども、だれにでもあることじゃないかという格好で話し合いをした。そういうふうになれば、子どもたちは非常に正直にそれにとたえる。

同時に、学校が楽しいという子が増えてくる。成績がいいから学校が楽しいとかではなくて、なんとなく学校って楽しいよねということになる。もちろん悪いことをしたら叱られるかもしれないけれども、頭ごなしに叱られることはないという部分ができあがってく

る。

相手の気持ちを考えてとか、一方的に叱りつけるのではなくとか言われていて、先生たちもそうしているつもりではいる。でも実際に、子どもたちにどう映っているかということまで今までは突っ込んでいなかった。それを実態調査をするという段階から出発する。そして、受け入れたくない指摘ではあるけれども、共通認識として、そこから出発していくと、変わるわけです。そういう地道な取り組みです。

## 子ども同士が助け合える関係を作る

次に、ピアサポートについてです。

ピアスメソッドは、学校の中にいかに全体で取り組む体制を作るかという方法ですが、ピアサポートというのは、むしろ子どもたちの中に子ども同士が助け合える関係を作っていくということなんです。ピア(peer)という語は、同僚とか同輩とか、仲間という意味です。では、子どもたち同士が助け合うというのは具体的にどうするか。最近いろいろな所でよく似た活動がされてきています。たとえば、ソーシャルスキルトレーニングというのがあ



# 特集●新しい生徒指導

ときに、上手な関係の持ち方と下手な関係の持ち方があって、その基礎的な部分はトレーニング可能であり、上手に交流し合えるように、ソーシャルスキルをトレーニングしてこうという考え方です。

ピアサポートというのも、ほとんど同じと考えていい。ただ、ソーシャルスキルトレーニングは、何をやるかということとは明確ですが、何のためにかが見えていない。

ピアサポートというのは、何をやるのかというの言葉の中には入っていませんが、最終的には子ども同士が助け合える能力をつけたい、そういう環境を作りたいということです。ですから、ピアサポートを目的とするソーシャルスキルトレーニングをすると言えば、一番わかりやすい。

でも、ソーシャルスキルトレーニングをすと言つても、マニュアル人間を作りたいわけではないですから、お互いがコミュニケーションをとるとはどういうことなのだろうという点が出発点になる。

我々は当たり前のように、相手の気持ちをわかってあげましょうなどと言う。ただ、日本の場合、説教する格好で、こうしなければいけませんという形でしか提案しない。何が相手の気持ちに助けとなるだろう、どうしてあげることがそれなんだろう、という部分が

実はあまりはつきりしていない。

結局、当たり前というか、そんなこと言わなくてもわかると思つてやっていたことが、どうも最近では言わないとわからない、それどころか体験させないとわからないという子どもが増えてきた。

ピアサポートの話に限りませんが、学級崩壊などで典型的に見られるのが、昔の子どもたちだったら、先生が一言叱ればそれで良かったのに、最近の子どもたちは全然それがわからない。なんでいけないの、と聞いてくると言うのです。先生に反抗するためではなく、本当にわからなくて聞いているようだ、と。

同じように、授業参観などのときにお母さんたちが授業中、教室の後ろでしゃべっている注意してもすぐまた始まる。それがいけないということが全然わかっていない。まさにそういう事態に至っているわけです。

ある程度の世代以上の人だと、場所によって行動は違えなくてはいけない、あるいは、まわりを見て、ここまでならいいと考えるのは当たり前だと思えます。しきたりとか慣習などが根強かったわけですから、それでコントロールされてきた。今、そういう地域の教育力がなくなつたと言われ、まさに母親や父親自身がそういうことがピンとこない世代になつてきている。

そういうなかで、子どもたちは、なぜ学校で授業中にそういうことをしてはいけないのかがわからない。あるいは幼稚園でも、ブランコで並んでいるところに割り込むのがなぜいけないのかわからない。なぜ順番を待たなければいけないのかもわからない。昔なら子ども同士のつきあいのなかで覚えたり、兄弟げんかのなかで覚えたり、地域のおじちゃんおばちゃんに叱られたり、もちろんお父さんお母さんから叱られたり、というなかで覚えていったのが、今、そのほとんどが機能していない状態です。それに加えて、自由保育



のせいもあって、小学校に上がる時点で何のトレーニングも受けていない。トレーニングと言うと非常に硬いけれど、昔なら自然に得られたものを、意識的にトレーニングするしかない。

今の中学生、高校生もソーシャルスキルが未熟です。実際、いじめでも、子どもたちが非常におびえているのは、具体的にいじめられるということよりも、何か変なことを言っている仲間はずれにされるのではないかとという恐怖心が大い。ですから非常に気をつかっているわけです。友人関係が非常に大きなストレスの原因になっています。なぜ友人関係に

そんなに気をつかわなければいけないのかというくらいに、負担になっている。

どういふふうに関係を作っているか、いかにかわからない。幼稚園児が砂場で、仲間に入れてという一言が言えないのと同じような次元で、いろいろな場面で、その一言が言えればすむものとか、そういう言い方をしなければ相手も怒らないのに、というようなことをしてしまふ。

そのあたりをトレーニングしようということ。ですからコミュニケーションの仕方、聞く態度とか話すときの態度を体験させていく。具体的には、一見ゲームのような（実際ゲームもしますが）ロールプレイングという役割を演じさせるなかで、体験させていく。

## 体験を通して 気づかせる

ソーシャルスキルトレーニングにしろピアサポートにしろ、ゲームやロールプレイングを通じて体験的に気づかせるということがミソです。従来なら言葉で一方的に教え込んでいたものを、体験的に気づくという格好にさせる。

これまでも道徳教育の中でロールプレイングなどはやられていたと思いますが、たいて

い最後は先生が締めくくる。「今日は、これこれこんな勉強をしました。人の話を聞くときは相手の目を見ようね」とやってしまふわけです。ところがソーシャルスキルトレーニングやピアサポートの場合は、先生はそれを言わない。言うかわりに聞く。「今日のことをやってみて何が一番面白かった？」とか「困ったことは何？」というふう聞いてやる。子ども自身が発見させるのです。だから子どもは自分の言葉で、自分の心の中の変化に気づく。それで、はじめて定着する。

ピースメソッドの場合の教員の共通認識と同じように、ピアサポートも、そうやって気づかせて定着を図っていくのがポイントです。コミュニケーションとは何か、ルールって必要なんだろうか、協力し合うってどういうことなんだろう、争い事はどうやって解決していったらいいんだろう、といったテーマを一方的に教師が教えるのではなくて、否応なく争いが起きるようなゲームを仕組んでおいて、それをクリアするにはどうしたらいいかを体験的に考えさせる。

これは、グループエンカウンターと呼ばれる取り組みとも似ていますが、あえてピアサポートという言い方している理由は、グループエンカウンターも目的を表していないからです。グループの出会いみたいなもの



イラスト 山県和彦

を、というところは、確かにグループエンカウンターという名前からわかる。しかし、次に何をするのが見えてこないのです。

実際には、学級担任によるグループエンカウンターという形で、学級経営の一環として、子どもたちを仲よくさせていくために使われることが非常に多い。それはそれで悪いことではないのですが、学級を超えないところが問題だと思う。クラス替えもあれば、外で他の学級の子どもたちと遊んだりもするわけです。どうしてそのグループエンカウンターを学校全体でできないんだらうかという疑問がある。たぶんグループエンカウンターが、集団カウンセリングを基盤としているので、それをそのまま学級に置き換え、カウンセラーの代わりに学級担任、クライアンの代わりに子どもたち、そのイメージにとらわれすぎているのだらうという気がします。

学級担任は抱え込んではいけないと申しましたが、にもかかわらず、グループエンカウンターは学級担任任せ方式ではない。そこに抵抗があります。自分の学級さえうまくいけばいいんだという発想に日本の先生たちは陥りがちなことを考えても、学級ということとを強調するグループエンカウンターとは、一線を画したい。むしろ学級を超えて学校全体への広がりを持ち、同時に自分が学級担任

でいる間だけではなく、次の学年に行っても、中学校に行っても、大人になっても、その子どもたち自身の力として身につけてほしい。

見通しと広がりを持ったものによろうと思つたら、今のような学級担任によるやり方ではなくて、当然、異学年交流や、学校全体の行事の中でそういうものを盛り上げていくというのが当たり前でしょう。

そこで、先ほどのカウンセリングの話にもかかわってきますが、グループエンカウンターを学級担任がやるということになれば、それこそすべての学級担任、つまり学校の先生全員ができればいけないことになる。しかし、それはむずかしい。

ピアサポートならば、生徒指導もしくは教育相談担当の先生と他の人たち、学級担任が手伝ってもいいし、あるいは地域のボランティアに入ってもらってもいいし、そういう形でできます。つまり、学校の中にそういうことができる人が数人いたらピアサポートができるわけです。それぞれの年間の大事など、たとえば小学校1年生なら当然1学期が一番大事だし、ある限られた時期に集中的にトレーニングすればいい。

ソーシャルスキルトレーニングもグループエンカウンターもピアサポートも、体験を通して気づかせていくという意味では共通です。

理想としては、こうした試みをしていた先生たちが、学校全体での生徒指導ということに目を向け始めれば、おのずからピアサポートにしかならないだらうという気はしています。

## ピアサポートが子どもを変える

ピアサポートの活用例をあげてみましょう。たとえば小学校5年生を3月ぐらいにトレーニングして、新1年生の世話をするとき何が大事なんだらうということを考えさせる。4月になって、6年生全員が1年生のクラスに入る。マンツーマンで子どもがはりつけますから、担任教師1人だったら、どこへ行くかわからない1年生でも、必ず6年生のお兄ちゃんお姉ちゃんが隣にいる。トイレに行きたいという1年生がいれば、連れていく。どこどこを見せようと言うことを6年生に言っておけば、トイレに行った子には先に図書館を見てこようということもできます。そういう形で活動することで、一つは先生が楽ができる。

しかし、大きいのは、1年生への効果です。1年生は、先生から言われたらいやだと言っても、6年生のお兄ちゃんお姉ちゃんに対しては言わない部分があります。先生にこっち

を見なさいと言われても見ない子でも、隣の6年生に、先生の方を見なきゃねと言われたら、見る確率が高い。それと同時に、もっと大きいのは6年生が必ず成長することです。1年生に先生の方を見なさいと言っておいて、自分が見ないわけにはいかない。

だからピアサポートをするというのは実は、人間関係をトレーニングすることなのです。しかもそれを発揮させる場所を作る。発揮させる場所を作ることによって、低学年にとってモデルを与えると同時に、高学年もそのなかで学んだことが完全に定着するという一連の流れができます。そうすると小学校あたりでは非常にいいプログラムになる。

今までも異学年交流とか縦割り班など、いろいろなことをやってきましたが、残念ながらそれを1年間の見通しを持って、あらかじめトレーニングしてから臨ませるというところまではいっていない。どうやってトレーニングすればいいかわからないし、何のためにやるのかという見通しもない。先生たちが日々忙しく、手が回らなかつたのです。しかし、一度こういうやり方をすればいいんだということがわかれば、日本の先生はそんなことは非常に簡単にやってのけます。そういうモデルみたいなものを作って、一つのプログラムという形で、たとえば4時間とか

10時間という単位でやれるようなものでやっていこうと思っっています。

学校で試しにやってみると、子どもたちは本当に喜んでやるし、やってよかつた、という声は大きいです。

一番のネックは、いかにして他の先生にピアサポートのよさをわからせるかということ。子どもたちが変わるから、それに気がつく先生は賛成してくれるけれど、まだ何もやってない段階で職員会議で提案すると、なんでそんな面倒くさいことをやるんだという話に必ずなるそうです。

今、ピアサポートに関心を持たれている方が勘違いしてるのは、外国のプログラムを日本語に訳せば使えると思っ込んでいることです。残念ながら日本の学校は抱え込みの体質があるから、基本的に抱え込みの体質がない外国のプログラムは機能しにくい。オーストラリアやカナダでは結構、学級担任がピアサポートをやる。それで差し障りがないのは抱え込みがないからです。日本では抱え込みの体質ができあがっているのです。せつかくのものが伝達されない。プログラムの内容は、日本で昔やっていたものにすぎず、それをただ翻訳して出せば、日本の先生はきつとばかにする。当然だと思えます。しかし、そのばかばかしいことを真面目にやってみなければ仕方

がない現状があるわけです。

どういう形で入れれば日本の学校でうまく機能するか。日本の学校のシステムの中で、どういう場面でそれを使ったらいいかということ、きちんと準備しなければなりません。翻訳したものを参考に日本のプログラムを作って、実際一番大変なのは、作られたプログラムをいかにして現場で活用させるか、です。では、ピアサポートをできる先生がどのくらいいればいいか、たとえば横浜には小学校が300余り、中学校150余りで、500校近くあるので、最低500人は先生がいないと動かない。

他の市町村でやるとなると、バックアップができていないので、各学校でやっていただくしかない。

## 今後の課題

ピアサポートを導入するにあたって気になることがあります。それは、本来学級の抱え込みの中に入れてはいけないにもかかわらず、その学級を維持するためにピアサポートを使うということ。初めは学級でやってもいいのです。ただ、学級でやるということ、学級担任がやるということは違います。学級でやるといっても、学級担任以外の人が入っ

てやってもいいし、学級担任とチームティーチングでやってもいい。あくまでも広げるという見通しのなかでやらないといけません。

カウンセラーの人たちもピアサポートに関心を持っていて、カナダでトレーニングを受けてこようということになるわけです。一番困るのは、カナダでトレーニングを受けるとカナダの学校でできるやり方は、日本の学校でもできると思ひ込んでしまうところなんです。そういうカウンセラーに日本の教師は反発します。反発というか不信任。何をやるうとしているんですかと。さらに、カウンセラーがピアサポートをやりたいので時間をくれ、

たとえば、問題にもなりません。ですから、カウンセラーが学級担任を説得して、学級担任にピアサポートをやらせるという形をとれば、日本の学校では丸くいくわけです。

小学校と中学校で違うところはあります。本質的には一緒です。小学校でやれば中学校でやらなくてもいいだろうとは思ってはいません。

ただ、小学校では、協力し合うとか、ルールを守るぐらいでやめればいいし、そういうトレーニングをもう受けていて、子どもたち同士で非常に人間関係がうまくいっている段

階になれば、ピアカウンセラー的な役割をさせてもいいでしょう。でも、相談に乗るといいう形までやるには、状況判断ができませんから、小学校ではむずかしい。

中学校1、2年ぐらいには抽象的な思考や倫理的な問題の全体を見て判断するということができませんから、中学校、高校ぐらいになったら、そういうピアカウンセラーのようなものを目指させることもある。ただ日本の場合、受験の問題がからんできますので、むずかしいかもしれません。

今、生徒会の中だけでやるリーダー研修用の短いプログラム、PTAの保護者対象の短いプログラム、小学校の保健委員会というような児童会活動の一環の中でやるプログラムなど、いろいろなバリエーションを作ってもらっているところなんです。できるところから始めていこうということです。そして成果が上れば、学年全体でできる、学校全体でやらなければ損だ、という話になってくるだろうと思います。

## これから生徒指導に時間を割くべき時代

私は、基本的に生徒指導をカリキュラムとして取り上げる時代になったのだと思います。カリキュラムという言葉の定義の問題もありますが、少なくとも時間割の中に生徒指導という部分があつていいのではないのでしょうか。ただ、その生徒指導というのは、従来の道徳のような時間ではありません。

外国の学校には、ヘルスアンドデイベロップメントとか、キャリアアンドパーソナルプランニングという時間があります。日本でいうと特活や道徳や、総合的な学習の時間を使った生徒指導のトレーニングや、そういうものを含めた形の時間です。一人前の社会人になつていくうえで自分の体も心も知りながら健全に発達させていこうというものです。

どういふふうに進達したら健全になるのか、その部分を意識的にちゃんと時間割の中に入れてやつていく時代なのだと思います。それが今までの日本では、きちんと考えられていません。

学校全体で6年間かけて、3年間かけてカリキュラムの中でやつて、うちの学校の子どもたちはここまでできると、子どもたちを自信をもって送り出せるようになってほしいのです。学力だけでなく、生徒指導に時間をかけていく時代だと思います。